

と云ふ云々其技と云ふ一也して後結する
と熟せり九柔乃其あり右三人より傳りて
法方より何事録しは形乃其の柔よりて教とわ
らその心志の勝ん事と來りて塵務と爲る
物とともめ其物より其初る事わ其沈て浮
るに沈て感とると云九相息と爲ると云

水早長左衛門信正

水早長左衛門信正者不知爲何國人剛強而有萬
夫之勇一日制剛僧者來水早之館曰當時當用武
勇之節也君雖精武術柔術不及吾吾其授技術也

信正聞之大喜賞制剛學其技術制剛悉傳授之曰
術既終能收練則雖萬夫不能相敵也告暇去信正
雖尋其居處不答又不再來後信正之術究妙推曰
制剛流

梶原源光衛門直景

梶原源光衛門直景者從水早信正得其宗達柔術
後奉仕尾張大納言義直卿以其技術鳴里村隨心
政氏遊直景之門爲精妙高橋隨悅諸氏和田十郎
右衛門正重各從政氏得其宗正重後改隨心延寶
八庚申年九月廿四日死法名保心

關口八郎右衛門氏心

關口八郎右衛門源氏心者其祖駿河今川家族也
自少年好刀槍及柔術各得其神妙始居武州江戸
大發名於柔術寔為精妙凡學刀槍及柔術者若干
其末流遍于諸州始居本多家後應紀州大納言賴
宣卿之召赴和歌山

大猷大君欲見其藝被召江戸于時

大猷大君不例日厚不能備其技術於 台覽嗚呼

惜哉後改柔心有三子伯玩八郎左衛門氏業奉社
賴宣卿領五百五十石仲萬右衛門氏英季號弥

太郎氏曉後改蟻櫻氏業後號魯伯其子八郎左衛
門氏連繼箕裘之藝奉社中納言吉宗卿凡柔心之
柔術古今無比之者其請身殆得妙

名代源川傳之房といふ柔術の達人なり是因
口氏業の傳を文とゆへり江戸小居してを名た
り遊其門人多く弓場彈右馬といふ言也
其家といふ

或人曰弓馬刀槍の技術よ遊ひる書と讀て
徳を職を勤る人いかゞ宏佐孫家馬の清純蓋
て其人乎清純弟の祖父と那兒耶作豆守

入道紹憲と云駿河今川の族也甲州武
回家は仕へて冬及び長篠にて戦死す子有
助神と

東照宮小倉仕改て岩佐と号とこも子倉本
つ有勝

右徳公小倉仕有二子兄曰普兼者武勇曰
孫又為清純初若自初弓る刀槍の術は遊
ひて至職とそし又書と音くして當世の
勤わりある故を小倉よ誓居と元禄年
中依テ公命江戸よゆり年既よ八十よ及ふ

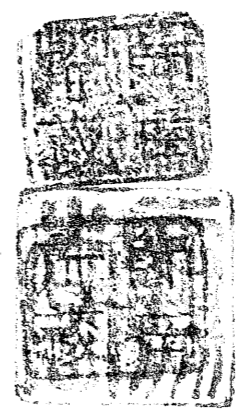
らと刀槍の技術と稱る事壯年の人にも不
可及日く同志を集めて刺撃して樂しめ
已熟を秋分と法くと人あしてを古の一人也
壯年小して文武の藝と不勤しては
つら小光陰とあつる人け翁の事と実をい
ふよ此ニなる事ありん

卷之十終

夫人之於物也愛之則及其物之所及故愛其色者及牧之羨愛其德者及舍之棠且仁者之愛山智者之愛水以其似適其性也况人之於人乎曰夏氏之翁性好武又業武造次顛沛從事於斯道精業廣其愛武也至矣既而其愛及武業之人於此揭近世以來武業之人若干而作之傳于道于器其名之著者歷々列序至上世之人則其傳其書行于世不復贅于此至近世之人則可據者甚鮮矣不啻敲其黨寸紙尺帛必索之口碑流說必

繹之正其是非審其真偽積年而成焉其用心之
 勤自他人觀之則如有勞自翁言之則所謂適其
 性者然也嗚呼若于人何幸乎哉就翁其名不朽
 由是言之則翁是青雲之士乎一日翁請予作之
 後序於是乎書

正德甲午冬十二月橘直養跋



享保元年季冬吉旦

茨木多充衛門 版行
 鶴鶴惣四郎

三都

江戸日本橋南壹丁目	同 須原屋 茂兵衛
同 浅草茅町二丁目	同 山城屋 佐兵衛
同 日本橋通二丁目	同 西宮 彌兵衛
同 中橋廣小路町	同 岡田屋 嘉七
同 芝神明前	同 岡村庄 助
同 下谷池端仲町	同 永樂屋 東四郎
同 本銀町二丁目	同 英野屋 大助
同 十軒店	同 吉野屋 仁兵衛
京都三條通御幸町角	同 菱屋 藤兵衛
尾州名古屋本町通	同 河内屋 喜兵衛
大坂心齋橋通北久太島	同 同 和助
同 全通本町北工入	同 同 卯助
同 全通備後田南入	

發行

書肆